

壁：令和4年度の念頭に当たって

振り返ってみますと、長い人生の間にいくつかの壁に遭遇してきましたが、超えたいけど越えられない壁もありました。「壁」といいますとすぐ思い浮かぶのは、古くは井上靖の「氷壁」（新潮社、1963）、比較的新しいところでは、養老孟司先生の「バカの壁」（新潮社、2003）があります。

個人的には、「壁」といえばすぐ思い出しますのは、現役の時に、研究室内でスタッフや学生さんとランディ・パウシュ著の「最後の授業」（The Last Lecture, 矢羽野 薫訳, ランダムハウス講談社, 2008）を話題にしたことです。その書籍の中に次のような言葉があります。

レンガの壁がそこにあるのには、理由がある。
僕たちの行く手を阻むためにあるのではない。
その壁の向こうにある「何か」を自分がどれほど真剣に望んでいるか、
証明するチャンスを与えているのだ。

なかなか含蓄のあるメッセージで今でも著者にとっては新鮮な“珠玉の言葉”として心に残っています。ランディ・パウシュは、バーチャリアリティの権威で米・カーネギーメロン大学教授でしたが、2008年7月に47歳の若さですい臓がんで逝去しました（下記、朝日新聞記事参照）。その前年の2007年9月に400名の聴衆の前で最後の授業を行ったのですが、3人の子供へのメッセージを含めた感動的な講義でした（書籍に付属するCDによる）。



朝日新聞
(2008年7月27日
朝刊)による

一方、最近、ベストセラーになっている「80歳の壁」（和田秀樹著、幻冬舎新書、2022）を読みました。高齢者医療の専門家の立場から、専門医が高齢な患者に施す治療に対して多くの間違いがあると指摘されていて、説得力のある内容になっています。曰く、「いやなことはやらずに、好きなことをやれ」、「健康診断は無駄」、「免許証返納の必要はない」などなど、悩む高齢者が快哉をさげびそうなフレーズがちりばめられています。ランディ・パウシュのいう壁は、超えられるか超えられないかわからない壁ですが、今77歳の筆者にとってここで言う“80歳の壁”は少なくとも筆者にとっては、どうしても乗り越えなければなりません、それには理由があります。

2010年の3月、茨城大学退職の折に最終講義をさせていただきましたが、その時、人生には三つのヤマがあって、最後のヤマは、“65歳から85歳”までというお話をさせていただきました。言ったことに責任を持つという立場からは、この80歳の壁は越えなければならないのです。そして、わが（一社）LRIIはここを乗り越えて継続していかなければなりません。

最後に、直接には“壁”という言葉は出てきませんが、関連のあることをご紹介します。畏友・了戒公利博士（（一財）土木研究センター専門調査役）が6月25日に開催した第2回「技術者講座」（（一財）土木研究センターと共同主催）の講演の最後に次のような漢詩を紹介していただきました。

還暦少年破冬眠

古希青年浴春光

喜寿壮年如夏山

米寿高年似秋天

白寿聖年化神人

（松室猛氏による）

“白寿（99歳）となって神と化す”とまではとても至らないだろうと思いますが、困難な課題を抱えつつある地域社会に少しでも貢献できるLRIIらしい新たな技術と方策を皆様とご一緒に探求してまいりたいと思います。ご賛同いただければ大変幸いです。

幾重にも なんと気づかず 超えてきた

あの壁 この壁 バカの壁

（令和4年7月12日、代表理事 安原一哉）